

青年の異性友人関係の変遷と 異性友人から受ける影響 —— アイデンティティとの関連から ——

柴 田 康 順

問題と目的

青年期の友人関係に関する研究はこれまでに数多くなされている。しかし、友人関係についての研究というものを通覧してみると、同性の友人関係について調べたものが大多数を占めていることが分かる。この理由として和田（1993）は、異性の友人関係と恋愛関係との間に差異を認めることが困難であることを挙げている。これまでの研究では友人関係に性差があることは認めつつ、友人関係に関する研究はあくまで同性の友人関係に限定したものであるのがほとんどであり、異性との関係について言及したものは異性愛的な感情を伴う恋人関係についてのものが多いと言える。

安達（1994）によると、青年期前期は両親との関係が中心であり、次第に同性の友人がかかわりの中心となり、青年期の終わりごろからは異性の友人や恋人が中心的な自己開示の相手となる。異性の友人は青年にとって重要な存在になってくるという見解を述べた研究もいくつか見られるが、異性の友人関係について中心的に扱った研究はあまり見られない。異性の友人・恋人との関係についてその重要性を指摘した安達（1994）も、両者を区別して扱ってはならず、異性愛的な感情を含まない友人としての異性を扱っているものはほとんど見られないのが現状である。谷口・大坊（2005）は異性関係を取り上げるにあたって、親密さの構造が異なることを理由として、恋人とそれ以外の関係を区別して検討する必要があるとしている。増田（1994）

によると、恋人関係は2人が社会的に規定された排他的な儀式的行為を行うことによって成立するとされ、このような排他的な行為を通じて恋人関係はそれ以外の関係とは明確に異なるものであると考えられる。

異性の友人関係に関して富重（2000）は大学生を対象とした異性不安と異性対人行動の関係について調べている。その結果、異性不安は異性に対する積極的な行動を抑制するだけでなく、異性との日常的相互作用を含めた異性愛人行動全般に抑制的な影響力を持ち、異性と良い人間関係を持ちたいという気持ちが強く、異性との良好な人間関係への期待が高い人ほど、異性に対する積極的な行動を多く行うと述べている。

対人関係行動に関連して、アイデンティティ理論を提唱した Erikson（1959）は、アイデンティティが十分に確立されていない場合、対人関係が深まることに対して、アイデンティティの喪失を引き起こしそうな対人的融合への恐れを抱き、かかわりあうことに気を遣い、消極的で形式的な対人関係を持つ傾向があるとしている。同性の友人関係とアイデンティティとの関連について調べた金子（1995）や松下・吉田（2009）なども同様の見解を示しており、いずれも友人との関係性の中で適切な距離でかかわり、互いの個性について認識していることがアイデンティティの確立と関連していると述べているが、やはりこれも異性の友人関係について調べたものではない。

同性の友人関係と異性の友人関係を比較した最近の研究として高坂（2010）が挙げられる。高坂（2010）は、大学生が同性の友人、異性の友人、恋人に対してどのような期待があるか調べ、「信頼・支援」、「外見的魅力」、「他者配慮」、「積極的交流」、「相互向上」という5因子を抽出している。高坂（2010）によると、同性友人に対しては男女ともに「信頼・支援」、「他者配慮」、「積極的交流」、「相互向上」を期待しており、異性友人に対しては「信頼・支援」、「他者配慮」、「積極的交流」を期待している点においては男女に共通している一方で、男性は「外見的魅力」を、女性は「相互向上」を期待しているという結果を述べている。さらに恋人に対しては男女ともに5つすべてを期待していたとされている。また、高坂（2012）は大学生の異性とのかかわり方について調べ、異性として友人を見るかどうかでかかわり方が異なると述べているが、具体的に自由記述の分類結果を見てみると、高

坂（2010）で述べられているような同性・異性の友人の違いとは異なる様相を呈していることが見て取れる。もちろん、研究目的の違いによる結果の差異と理解することもできるが、予め設定された項目に対して限られた形式の回答を求める評定尺度法と、比較的回答の自由度の高い自由記述法という回答形式の違いによる結果の差異である可能性もある。

以上のことから、本研究では未だ十分に研究されているとは言えない青年の異性友人関係について探索的に調べるために半構造化面接によってデータを収集し、異性の友人関係がどのように変遷し、異性の友人関係からどのような影響を受けてきたのか把握することを目的とする。また、異性友人関係についての捉え方が個々に異なることが予想されることから、青年のアイデンティティの状態に着目し、アイデンティティの観点から考察する。

調査方法

調査時期

2011 年 11 月～2012 年 3 月

調査協力者 都内近郊在住の日本人青年に対して調査依頼を行い、調査目的に関して合意の得られた 10 名に対して調査を行った。調査協力者の平均年齢は 23.2 歳（SD=2.39）であり、男性 5 名、女性 5 名であった。調査協力者の性別および調査当時の所属と年齢について表 1 に示す。

表 1 調査協力者の属性（調査当時）

	性別	年齢	所属
A	男	24	国立 A 大学大学院
B	女	26	金融系企業
C	男	22	私立 B 大学
D	女	20	私立 C 女子大学
E	男	21	私立 B 大学
F	男	26	心理系専門職
G	女	26	法律系専門職
H	女	20	国立 A 大学
I	女	24	建築系企業
J	男	23	教育系企業

調査内容

(1) 半構造化面接

調査協力者に対して、表 2 のような質問項目について半構造化面接を行った。

本研究では面接法による調査結果を分析するにあたって、プロトコル分析

的手法を用いる。プロトコルを分析する際には分析単位を考慮する必要があるが、単語単位、文単位のカテゴリー生成によっては調査協力者の語りの内容とその背景を十分に理解することはできない。そのため、データの客観性を重視するために語りを文脈から切り離した状態で分析するという社会構築主義的な発想ではなく、語りに解釈を加えて内容を読み取っていくという内容分析を行うことにする。分析の単位はエピソード文脈単位であり、各々のエピソードの文量は1行を40字とした逐語記録とすると5～10行程度であった。エピソード文脈を分析単位とすることで調査協力者の語りをエピソードごとの反応様式の差異として捉えることができると思われる。

表2 異性の友人関係についての質問項目

<関係性>	
・最近、異性の友人とはどのような付き合い方をしているか？	
・過去の異性の友人との関係と比べるとどのように変わっているか？	
<関係性の維持>	
・異性の友人との関係を続けるために、どのような工夫をしているか？	
<性別による友人の差異>	
・異性の友人と同性の友人とは、どのような点で異なるか？	
<影響>	
・異性の友人との関係の中で、どのような影響を受けているか？	

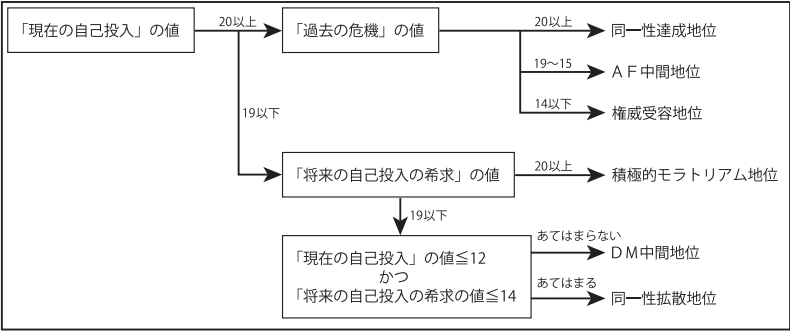


図1 アイデンティティ・ステータスの分類チャート

(2) 質問紙調査

調査協力者の調査時のアイデンティティの状態を量的に測定するための目安として、調査協力者に対して同一性地位判別尺度（加藤，1983）を実施した。同一性地位判別尺度は Marcia（1980）のアイデンティティ・ステイタス理論を参照して作成されたものである。この尺度は『現在の自己投入』、『過去の危機』、『将来の自己投入の希求』（各4項目、6件法）という3つの変数から成り立っており、各変数の得点を分類表に従って分類することで、アイデンティティ・ステイタスを評定するというものである。加藤（1983）は Marcia（1980）の分類をもとに、i）同一性達成地位、ii）権威受容地位、iii）積極的モラトリウム地位、iv）同一性拡散地位の4分類に加え、v）同一性達成－権威受容中間地位（以下 AF 中間地位）、vi）同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位（以下 DM 中間地位）の2分類を設定している。調査協力者のアイデンティティ・ステイタスの分類に関しては、加藤（1983）に基づいて図1のような手順で行った。

倫理的配慮 調査に際して IC レコーダおよび筆記により調査内容を記録すること、語りの内容について公表する際には協力者が特定されることのないように配慮すること、また回答の拒否や途中で終了により調査協力者は何ら不利益を被らないことなどを調査依頼時および同意書への署名を求める際に書面と口頭で説明した。

結果と考察

質問紙調査 質問紙の結果を表3に示す。調査協力者のアイデンティティ・ステイタスは達成地位が1名、AF 中間地位が1名、積極的モラトリウム地位が1名、DM 中間地位が7名となり、調査協力者の大部分が DM 中間地位に分類される結果となった。アイデンティティ・ステイタスごとの平均値の比較を行うにも、1名のみで構成される3ステイタスと DM 中間地位のことになり、統計的な比較検定を行うことはできなかった（表4）。

面接調査 面接の結果から、異性の友人関係の内容と異性の友人に対する意

表 3 調査協力者の同一性地位判別尺度得点およびアイデンティティ・ステイタス

No.	性別	同一性地位判別尺度			
		現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求	アイデンティティ・ステイタス
A	男	14	19	14	DM 中間
B	女	13	16	15	DM 中間
C	男	16	20	17	DM 中間
D	女	17	15	17	DM 中間
E	男	15	16	13	DM 中間
F	男	19	23	21	モラトリアム
G	女	21	22	17	達成
H	女	16	11	12	DM 中間
I	女	18	17	18	DM 中間
J	男	22	17	16	AF 中間
Mean (SD)		17.1 (2.92)	17.6 (3.53)	16 (2.62)	
Standard Mean (SD)		17.2 (3.3)	17.8 (3.1)	17.5 (3.1)	

表 4 ステイタスごとの同一性地位判別尺度平均値および標準偏差

		達成地位 (N=1)	AF 地位 (N=1)	モラトリアム地位 (N=1)	DM 地位 (N=7)
同一性地位判別尺度	現在の自己投入	21	22	19	15.57 (1.72)
	過去の危機	22	17	23	16.29 (2.93)
	将来の自己投入の希求	17	16	21	15.14 (2.27)

識の変遷をまとめ（表5）、異性の友人関係の性差について考察する。以下の記載の中で調査協力者の語りは「 」でくくり、フォントサイズを変えて表現することとする。

（1）異性の友人関係の変遷

小学校3, 4年以前——就学以前から性別についての差異は意識されているが、話すことや遊びの内容は変わらず、「場を共有している人」と一緒に遊ぶことが多い。Aのように「男の子、女の子ということは分かりますけど」

表5 異性の友人関係に対する意識の変遷と男女比較

	～小学校低学年	小学校高学年 ～中学校	中学校～高校	大学～
男性	性別による区別なく遊んでいた ＊一緒にいる人と共通の遊びをする	女性グループが閉鎖的になっていく 女性らしい身体つきに戸惑う ⇒女性に対する分からなさ生まれ、接し方が分からなくなる ⇒名前の呼び方が変わる、赤面するなど、異性に対する反応が変わる	女性のことか少しずつ分かるようになる 親密な関係に憧れを持ち始める ＊男子校に入った場合、女性との交流はほとんどなくなり、女性に対する分からなさは残り続ける一方で、女性との交際に対して憧れを持ち始める（E、F、J）	性別の影響はほとんどなくなり、同性の友人と同じように接するようになる ＊話の内容などは性別によって区別される ⇒異性に対するイメージが固まる ＊アイデンティティの状態によって異性との適切な距離感へのこだわりが左右される可能性がある。
女性		趣味や話の合う人たちとグループを作り始める 男性とは遊びや話が合わないと感じ始める それ以前と比べて接し方が変わった男性に対して接することが少なくなる	男性との交流は同じグループのメンバーに依拠する ＊グループに属していない場合は男性との交流は少ない（B） ＊女性が少ない環境の場合、男性との交流は自然と行われる（H）	＊恋愛関係などより親密な関係を築くこと自体はアイデンティティの状態に関連は見られず、関係の維持や期待がアイデンティティの状態に関連する可能性がある。

として、明確に『異性』という捉え方をしていた調査協力者は見られず、仲の良かった異性の友人とのエピソードも極めて曖昧なものが多かった。Eの「〇〇ちゃんと結婚するって言ってたらしいですよ」という語りにも見られるように、未熟ながらも異性のことを恋愛対象として捉えることができていたと考えることもできるが、小学校3,4年頃までは『異性』の概念自体が明確に形成されていなかった可能性がある。

小学校高学年～中学校——小学校高学年頃になると女性の方が早く二次性徴を迎えることが多く、男性は特に女性の身体面の変化に戸惑い、これまでと同じようなかかわりを持つことができなくなったように感じて、女性に対する分からなさが徐々に芽生えてくる。女性のことが分からなくなる中で、女性に対する名前の呼び方が変わったり、女性と話すときに赤面したりするなど女性に対するかかわりが変わってくる。

女性との関係性の変化に戸惑う男性に対して、女性は趣味や話が合う人と行動を共にする時間が増えてくる。次第に男性との間では遊びや会話の内容が合わないと感じ始め、男性よりも同性の女性と集まることが多くなる。その流れの中で男性の友人とのかかわり方が変化し、女性に対して余所余所しくなった男性とは積極的にかかわることが少なくなる。その結果、女性においては非常に閉鎖的な同性集団が形成され始め、それに伴い男性も同性集団を形成し始めることになる。

中学校～高校——中学校から高校にかけて、男性は女性とかかわる機会が少しずつ増え始め、女性のことが少しずつ分かるようになってくると、女性との親密な関係に対して憧れを持ち始める。男子校に入った場合は周りの環境に女性がいなかったことから必然的に交流する機会が減り、女性に対して持っていた分からなさは解消されることなく残り続ける。一方で、女性との親密な関係というより女性と交際することに対して憧れを持ち始める。

女性は自分が行動を共にしている同性集団のメンバーが男性とどのような関係を持とうとしているかによって男性との接触機会が大きく左右される。そのため、特定の集団に所属していない女性の場合は、男性との接点を見つけることができないと男性と交流することができず、結果的に集団に所属している女性と比べて男性とかかわる機会が少なくなる。女性が少ない環境に

いる場合は自然と男性との交流が行われるが、その場合でもBのように「性別で共通だから」ということを理由に女性との交流が先に行われる。

大学以降——男女ともに異性の友人関係において性別の影響はほとんどなくなり、同性の友人関係と同様のかかわり方をするようになる。友人の性別によって話の内容や態度は区別した上で、異性の友人を個人として捉えられるようになる。すなわち、異性に対するイメージが確立され、男性は女性について「自分とは異なる価値観を持つ存在」と捉えるようになり、女性は男性について「客観的にものを捉えられる」「仕事に熱中できる」といったイメージを持つようになる。

以上のことから、異性の友人関係の変遷は次のようにまとめられると思われる。異性の友人関係は、二次性徴の時期に女性が同じ価値観を共有する同性の同質集団を形成するようになるにつれて、男女の交流がそれ以前と比べると制限されることによって意識され始める。女性の同性集団は閉鎖的であることから、男性からは女性の身体的な変化ばかりが際立って意識されるようになり、男性は女性の内面的な部分について理解できないものと感じるようになる。また、男性にとって女性は『女性』という集団として捉えられるようになるため、個別のかかわりの中でも女性一般を想定しながらかかわるようになる。このような女性の同性集団の閉鎖性と分からなさについて、DM中間地位に分類されたAは以下のように語っている。個人的な関係としてではなく集団として女性を捉えていたことがよく表れており、中高生の時期の男性が女性をどのように捉えていたのかということが理解できる。

「女性っていうのが、分からない存在、なんかよく理解できない存在だっていうのが、うーん、いったんこう大きくなって。まあまた、ある程度落ち着いたのかなという感じもしますね。＜中略＞ある女性と上手くいかなかったとすると、えーその中で女性全体と上手くいなくなるんじゃないかっていう感覚ですかね。なんかやっぱりその、女性同士が、繋がってるような感じが、何となくあるんでグループっていうか、なんていうか。あの、でそこ全体で気まずくなる、いづらくなるみたいなことが、なんか、男に対して以上にあるかなと思います。男だと、ちょっとなんか、なんだ、ちょっとトラぶったとしても、まあいつと仲が、あんまり上手くよくないだけで、他とはまあそれなりに、付き合えるかなと。ま特別そのリーダー的存在の相手でなければってことですけど。その女性に関してはなんとなく、そうではないかなっつかこう、うまく、誰か一人でも上手くいかないと、全体と上手くいかないんじゃないかという感じがあります。」

A は男性に対しても親密な関係性を感じられないと語る中で、女性に対してはより距離が遠いという認識をしている。だからこそ自分から同性を含めて友人とのかかわりを遮断し、対人関係を「外から眺めて、こういうことなんだろうと理解する」時期を経て、女性とのかかわり方を模索することで、女性との友人関係を持つことに対して拒否的ではなくなったと語っている。

男性が女性のことを理解できないと感ずるようになるのに対して、女性は男性に対する捉え方が大きく変化することはないが、話題が合わないように感じ始めた結果、男性との交流自体は少なくなる。DM 中間地位に分類された B は自身の友人関係について小学校低学年から大学までどのように捉えていたかという点について明確に「かかわる機会が多かったから」と語っている。

「小学校の低学年とかそんなに意識はしてないけど、たまたま仲いい子が、女の子だった、くらいな感じ。でも高学年で、引越した先で作ろうとしたのはやっぱり女子の友達だから、その辺はかなり、なんか意識はしていた気がする。で、男子の友達別にいなくてもいいやとまでは思わないけど、そんなに重要、どうしても欲しいとは思ってない。高3でやっぱり友達ができたのは、いっぱいかわる機会が多かったから。で話も合うしー、ていうことがわかったんで、うん。で大学はずいぶん男友達が多かったのは、やっぱり男子ばかりだったからだと思う。＜中略＞なんか少なくとも共通点があった方がいいじゃん。なんか、そうそう、少なくとも、なんか性別で共通だから。なんか男子に話しかけて1個も共通点ないとかだったらもう、会話が続けられない。なんか女子ならこういうのが好きそうなはずだぞっていうのはなんか、あるじゃん。」

B は小学校5年生の時に転校し、転校後に友人関係において特に関係開始の時点で相手の性別を気にするようになっている。その後男性の友人とかわる機会が増えた結果、男性とも話が合うということが分かり、男性の友人関係に対する意識は変化している。

ところで、調査協力者の中でともに DM 中間地位の C、H は同性の友人関係に居心地の悪さを感じるがゆえに異性の友人関係の中に身を置いてきたとしている。C は同性の友人関係の中で「劣等感を感じてしまう」という理由から、H は同性の友人関係に「煩わしさを感じる」という理由から、異性の友人関係に居心地の良さを感じているが、彼らは二人とも友人関係が恋愛関係に変化することを恐れていることが特徴的である。以下に異性の友人関係と恋愛関係についての H の語りを引用する。

「男子ってあんまりそんなグループ間対立みたいなのないような気がするんですけどね、私がどこにでも所属してるからかもしれないですけど、そこまで集団行動命じゃないような気がするじゃないですか、男子は。女子は何するにも、トイレ行くにも誘わなきゃならないんでっていうのが、そもそも耐えられない。趣味云々の前に、そういうこともあって、男子の方が楽っていうか、楽しいというかむしろ楽っていうく中略でも踏み入れすぎると駄目ですね、踏み入れられすぎると駄目ですね。小学校とか中学校とかは、割と向こうも意識してなかったと思うんですよ、男子とか女子とか。全然付き合ってたと思うんですよ、高校とか特に大学になってくると、仲良くなりすぎると、向こうが意識しちゃって駄目になるんですよ。」

Hは異性の友人関係が恋人関係に変わりそうになるとその関係を解消してしまう。Hは恋愛感情を男性から向けられても、その感情を受け止められないということで拒絶してしまうということが続いている。Hにとって異性の友人関係と恋人関係は、感情の交流の質と程度において明確に異なるものである。対人的な相互交流の場から退避することで自身の精神的な安定を図る人にとっては、恋人関係は避けるべき関係性であり、あくまで友人関係であることに固執する傾向があるということが予想される。

(2) 異性の友人関係から受ける影響とアイデンティティの関連

異性友人関係から受ける影響とアイデンティティ・ステータスの間には、「ものの考え方が違う」と感じ、その違いに関心を向けられる場合に『異性』というイメージが固まってくるという点以外に明確な関連は見られず、共通して異性の友人に対しては「嫌われたくない」が「友人関係が維持できない場合も仕方ない」といった受身的な語りが多く見られた。異性友人関係は恋愛などの親密な関係の影響を受けるため、自分自身だけでなく異性の友人に恋人ができたりするなど相手側の状況の変化からも関係の維持が難しくなることがはじめから想定されていることが特徴的である。

この中で①異性の友人関係が恋人関係になることを恐れる人が2名(C、H)、②異性の友人のイメージが確立できず、分からないままの状態にいる人が2名(A、E)、③異性の友人は同性の友人とは異なる価値観を持っていることを理解した上で友人関係を築いている人が残りの6名であり、前二者はDM中間地位に分類されている。

まず①は、同性の友人関係に居心地の悪さを感じているからこそ異性の友人関係を求めているのだが、異性の友人関係における適切な対人的距離をつ

かむことができないため、相手との関係が恋人のような対人的距離になってしまっていることに気づかず、近すぎる対人的距離になっていたことに気づいた結果、相手との関係から退避して友人関係自体を解消してしまうことが多いということ特徴的である。次に②は、異性の友人関係を表面的には築くことはできるが、相手と個別的な対人関係を築いているという意識を明確に持っておらず、あくまで『異性』という枠組みで相手を理解していることが特徴的である。③が異性との個別的な対人関係を築いていることと比べると、①②は異性を意識した上で個別的な対人関係を築くことができていない点で共通している。しかし一方で、①は同性の友人関係が築けないことから異性の友人関係を積極的に求めているのに対して、②は異性の友人関係を求めているわけではなく、異性との心理的距離は遠いという相違点も存在している。

このように対人関係上の距離において差異は見られるが、このことが直接的にアイデンティティの状態と関連しているわけではない点で、異性の友人関係においては対象への同一化や取り入れが生じにくい対人関係一般という性質を持つという可能性について指摘することはできると思われる。

「異性の友人関係に限らない」という語りは多く、対人関係一般における姿勢が語られたが、その中で達成地位の G と DM 中間地位の H が友人から相談を受けたときにどうするかという文脈で特徴的な語りをしているので比較するために両者の語りを引用する。

「まあ顔見知りの人にどう思われてもいい、いいって言う気持ちも、あるし、自分の事あんま反省したりもしないし、適当にひゃーって流せるんだけど、親しい人に対しては、うーん、なんかこう、言う時にはけっこう気を遣ってるかも。バカ話してる時はどうでもいいんだけど、なんかけっこう真剣な話をしている時には、私こういう事言っていんだろか？とか、とか、あのう、結構考えてる。逆になんかすごく、何も言えなくなったりとかすることも多いかも。それは女の子に対してもだけど。すごく、なんかこう、悲しい出来事があった時に、慰めたいんだけど、慰める言葉が出てこない。だって、私はあなたじゃないから。何を言え方がいいのかわからない。＜中略＞どうでもいい人だったら、なんか適当なことと言ってられるじゃない。一般的にこんな事を言うんであろう、みたいな。(G)」

「一般的アドバイスは出来るんですよ。出来るんですけど、でも自分がその立場だったらどう思うかっていうのは絶対にできないタイプです。どうするかっていうならまだしも、どう思うかって言われても思えんもんっていう。(H)」

G は友人関係の親しさを「顔見知り」と「親しい人」という二者に分けて語っており、顔見知りに対しては自分の言動に大した責任も持たずに一般論で話すことができるが、親しい人に対しては適当なことは言えないので答え

られないことが多いとしている。一方、Hは友人に対して一般論で話すことはできるとしているが、相手の問題を自分に引き付けて考えることはできないとしている。Gは友人関係において親密さの度合いを明確に意識しており、親しい友人に対しては「私はあなたじゃない」ということを理由として軽々に受け答えができないと語っていることから、友人との関係において責任が生じる場面を想定しているが、Hは責任が生じるような場面を回避しているように思われる。

このことから友人関係における親密さは、自分と友人がお互いに影響を与え合っていることを自覚していることと関連しており、アイデンティティが十分に確立されていない状態では、友人関係において自身が相手に巻き込まれ、感情的な交流を避けられなくなる不安を抱えている可能性がある。このような特徴を有しているのはA、C、D、Hであり、A以外は特定の異性との親密な関係である恋人関係から退避しているという共通点があった。

総合考察

本研究ではこれまであまり研究がされていない青年の異性友人関係を探索的に調べるために半構造化面接を行い、青年の異性友人関係の変遷とそこから受ける影響についてアイデンティティの観点から検討した。

異性友人関係について、性別や遊びの内容の違いなどは小学校低学年以前にも認識しつつ、同性の友人との違いはほとんど見られない。また、異性友人関係は基本的には同性の友人との混合集団において関係開始と関係維持が行われることが多いが、異性友人関係を個別に開始するというような状況自体があまり存在しないことからこのような特徴が見られるようである。すなわち、関係開始と関係維持の側面において個別に関係構築が行われるのは同性の友人関係に多く見られ、集団での人間関係から関係構築が行われる形が多いのが異性の友人関係であると思われる。

『異性』という意識が強まるのは小学校高学年頃から大学入学頃までであり、男性と女性では異性に対する意識が変化する様相が異なり、それは同性

集団の形成と関連が深いと思われる。二次性徴と前後して女性において同性による閉鎖的な同質集団の形成が進み、男性からは女性の身体的な変化は理解されつつ、内面的な部分が不透明になった結果、女性に対する分からなさが増大し、それまでと同じかわり方ができなくなる。一方で女性から男性に対する意識はそれ以前とそれほど変化していないが、男性とは違うという感覚を覚え、結果的に男女ともに同性集団の凝集性が高まっていく。男性は、女性が同性集団を形成することによって女性のことを集団として理解するようになりつつも、少しずつ同性の友人と同じように個人として関係を持つようになっていくと考えられる。

また、異性友人関係において衝突は受身的に回避されつつ関係維持への努力が積極的に行われることはなく、特に恋愛や結婚など相手側の状況の変化によってかわり方が変わると捉えられていたことが特徴的であった。この点について異性友人と恋人関係は切り離せるものではなく、対人的距離感は異性友人に対しては同性の友人より遠いものとして捉えられているものと考えられる。異性友人関係においては相手に同一化したり、相手の特徴を取り入れたりする過程は生じにくく、あくまで対人関係一般の文脈で捉えられていると思われる。これらのことから、異性友人との個別的なかわりを通して異性イメージを明確なものとすることで、同性との違いを受け入れていくという点において、アイデンティティの確立の度合いを想定できると考えられる。

本研究の結果から、異性の友人関係が集団的な関係性であり、個別的な関係性になることが少ないのは、青年本人が恋人関係との違いを明確に認識していることに起因していると推察される。異性友人関係と恋人関係の違いについては、感情的な交流の頻度と強さが挙げられ、異性友人関係においては恋人関係ほどさかんに感情の交流が行われないため、相手との関係を通して受ける影響自体が異性イメージを形成するために必要なものという程度の曖昧なものとして捉えられている。

しかし、本研究の結果からだけでは異性イメージが異性友人関係を通して形成されたのか、恋人関係を通して形成されたのかを明確に区別することはできないことが問題である。恋人関係に関連して大野（2010）は「アイデンティティのための恋愛」という言説を提示し、その特徴として①相手から

の賛美、賞賛を求める、②相手からの評価が気になる、③呑み込まれる不安を感じる、④相手の挙動から目が離せなくなる、⑤結果的に交際が長続きしない、という5つを挙げている。大野（2010）は自分のアイデンティティに自信が持てないために、恋人関係において相手からの賞賛を得ることをアイデンティティの拠り所にしており、そのため賞賛し続けてもらわないと自己存在の基盤が危うくなる。そして、こうした不安をベースにした恋愛関係は互いに監視し合う息苦しい関係になりやすく長続きしないと指摘している。一方、高坂（2010）は大野（2010）の見解とは異なる結果を見出し、恋人関係とアイデンティティの関連は自身のアイデンティティの状態よりも恋人がどの程度アイデンティティを確立していると推測しているかと強く関連しているとしている。特に、恋人のアイデンティティが達成型や早期完了型であると推測された場合、恋愛関係は青年に心理的・実生活的にポジティブな影響を与える可能性があるとして述べている（高坂，2010）。

恋人関係のように特定の他者と長期にわたって継続する人間関係については青年期までの個体発達の側面からだけではなく、関係性発達の側面からも研究が進められる必要があり、成人前期の発達課題である『親密性 対 孤立』とも関連が深い問題である。今後は異性友人関係と恋人関係についてその差異を明確にしていくことで、青年の親密性の形成がどのようなプロセスを辿っていくのかという点について考察していく必要があると思われる。

【参考文献】

- 安達喜美子，1994，青年における意味ある他者の研究——とくに、異性の友人（恋人）の意味を中心として——，青年心理学研究，6，pp.19-pp.28
- Erikson, E.H., 1973, 自我同一性（小此木啓吾（訳）），誠信書房．（Erikson, E.H., 1959, *Identity and the Life Cycle*, New York, Noron.）
- 金子俊子，1995，青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究，6（1），pp.41-pp.47
- 加藤厚，1983，大学生における同一性の諸相とその構造，教育心理学研究，31（4），pp.292-pp.302
- 高坂康雅，2010，大学生における同性友人，異性友人，恋人に対する期待の

- 比較, パーソナリティ研究, 18 (2), pp.140-151
- 高坂康雅, 2012, 大学生の異性友人関係に関する探索的研究, 日本教育心理学会総会発表論文集, 54, pp.267
- 増田匡裕, 1994, 恋愛関係における排他性の研究, 実験社会心理学研究, 34, pp.164-pp.182
- Marcia, J.E., 1980, Identity in adolescence. In Adelson, J.(Ed.) *Handbook of Adolescent Psychology*. Wiley.
- 松下姫歌・吉田愛, 2009, 大学生における友人関係と自我同一性との関連, 広島大学心理学研究, 9, pp.207-pp.216
- 大野久, 2010, 青年期の恋愛の発達, 大野久(編著), シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学, ミネルヴァ書房, pp.77-pp.109
- 谷口淳一・大坊郁夫, 2005, 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討, 実験社会心理学研究, 45 (1), pp.13-pp.24
- 富重健一, 2000, 青年期における異性不安と異性対人行動の関係——異性に対する親和指向に関する他者比較・経時的比較の役割を中心に——, 社会心理学研究, 15 (3), pp.189-pp.199
- 和田実, 1993, 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異, 社会心理学研究, 8 (2), pp.67-pp.75